

外国人スポーツ留学生のライフストーリー ～トンガ王国からの歴代ラグビー留学生を対象として～

Life stories of foreign student athletes

スポーツクラブマネジメントコース

5016A315-9 松本 健嗣

研究指導教員：間野義之

I. 研究の背景

2020 年までに、グローバル戦略を展開し日本への外国人留学生を 30 万人に増加を目指す「留学生 30 万人計画」を実現すべく、2008 年以降、第二次安倍内閣でも引き継がれている。外国人スポーツ留学生も含まれるが、具体的な目標等明記はない。しかし、ラグビートップリーグでは外国籍枠が設定され、日本代表でも外国籍ながら活躍している。更に、競技引退後も日本で指導者として活躍する者もいる。一方、在学期間を過ぎると帰国する者が多い現状がある。外国人スポーツ留学生が、日本のスポーツに大きく関わるなか、纏まった報告書もなく、実状が把握できていない現状がある。

II. 先行研究の検討

外国人スポーツ留学生に関する研究は、松本 (1991) は、大学にスポーツ留学する学生の出身国や競技を紹介している。松元ら (2009) は、大学在学中の支援拡充の必要性を主張する。また、三代 (2014) は、セカンドキャリアに向けた日本語習得の重要性を述べる。グローバルな観点から、千葉ら (1999) は、国境を跨ぎ活躍する選手には様々なタイプがあると示し、Maguire ら (1998) は、ボスマン判決にふれ、サッカー選手の帰属意識を明らかにした。多くの研究は外国人スポーツ留学生自身を調査対象とし、来日前から来日後現在に至るまでの実態を明らかにする先行研究は見られない。

一方、久野 (2015) など、外国人留学生のライフストーリーを記述し、留学前後の経緯を詳細に記述し実態を明らかにしており、有効な手段として考えられる。本研究は、外国人留学生研究で実績のあるライフストーリー分析にて、トンガ王国から大東文化大学に留学した外国人スポーツ留学生を対象に検討を進める。

III. 研究目的

日本における外国人スポーツ留学生の来日前から来日後現在に至るまでの実態を、大東文化大学とトンガ王国に着目し、ライフストーリーを通して明ら

かにすることである。

IV. 研究方法

大東文化大学の外国人スポーツ留学生だった 8 名に対して、半構造化インタビューを実施した。インタビュー項目は口頭に加え紙面で配付した。内容は、「来日前の状況」、「留学のきっかけ」、「大学留学中」、「就職のきっかけ」、「就職（競技継続）」、「競技引退後」、「日本で生活する上で必要な要素」、「今後について」の 8 段階である。更に、インタビューを補完すべく面会した大東文化大学ラグビー部特別顧問、トンガ王国ラグビー連盟 CEO など計 4 名である。

V. 研究結果・考察

・「来日前の状況」では、生活・競技・勉強に関する発話を得られた。生活面では、家庭が貧しく家族が海外に出稼ぎに行く旨の発話であり、競技面では、ラグビーだけでなく様々なスポーツに取り組んだとの発話。更に、勉強面では、家族から将来のために勉強が重要であると日頃から教わったことが聞かれた。

・「留学のきっかけ」では、国内の教育環境は整っているとはいえず海外に進学せざるを得ない状況との発話が見られた。結果として、全員大東文化大学への留学を決断したが、大学からの金銭的フォローにより留学が現実になったと語られた。留学するにあたり、家族の理解が重要であることも判明した。

・「大学留学中」では、全員が入学前に日本語を 1 年間勉強する必要があったと語っている。これは、日本に馴染むうえで必要だとの同大学の意図だと考えられる。また、在学中、既に日本での生活を決めた者も多数おり、留学を通じ日本企業への就職など視野に入れたスポーツへの取り組みが適合したのがわかる。

・「就職のきっかけ」では、大学近くに所在するメーカーとの定期的な練習試合から交流が生まれ、監督同士で就職の話し合いがなされたことが分かった。ただ、自らが望む会社を探した者、母国への帰国を視野に入れて悩んだ者も見られた。しかし、全員が日本で正社員での採用を希望したことが判明した。

・「就職（競技継続）」では、仕事は順調に進んでおり、正社員として働きラグビーを続けている。ただ、仕事での日本語のレベルに戸惑った者、仕事の理解に苦しんだ者、海外支社を希望した者もいた。競技面では、W杯等日本代表で活躍した者も多く、大学卒業後さらに競技力が向上したことがわかった。

・「競技引退後」では、母国に帰りたいとの発話はない。これは、日本の生活に馴染めたこと、家族が出来たことが要因として考えられる。また、恩返し・感謝・社会貢献といったフレーズが多数見られた。

・「日本で生活する上で必要な要素」では、日本語や文化などの勉強、ビザ取得のための規制緩和、大学等留学生の受け入れ機関の支援体制の拡充、地域住民との密な関わりが主に聞かれた。

・「今後について」では、トンガ王国に帰りたいとの母国の生活を懐かしむ声、日本との架け橋になるとの声、また、現役選手からは契約更新などプロ契約の厳しさが聞かれた。

以上、考察を纏めると、「離散社会」と「金銭的サポート」のキーワードで示されると考えられる。

トンガ王国は、「離散社会」という社会構造を取り、調査した対象者も大きく関係する。例えば、幼少時から英語教育やそろばんに携わり、日本の中学校受験時は、国内で将来を左右するテストが実施されるなどの発話が得られた。これらは、日本を始め海外で成果を上げるための教育体制と読める。またトンガ王国が、勉学に比重を置くとの発話が得られ、就職を見据えた施策であると考えられる。具体的発話では、「正社員」や「家族を助ける」など、勉強し本国の家族支援に繋がる留学先で就職する事柄も示された。留学における勉強や学生生活は、留学先での就職などに繋がるライフストーリーの一部であることがわかる。

次に、「金銭的サポート」について、本研究対象の留学生は、物理的に近いニュージーランドなどではなく日本を選択した。理由は「他国と違い学費等を全額負担する」ことが挙げられる。ライフストーリーからも、「留学費用の支援」の発話がある。家族や多くの者が喜んで送り出す姿勢も発話から得られ、「離散社会」が根底に大きく影響することがわかる。

補完すべく行ったインタビューでは「離散社会」について、「テスト結果で、進学する学校が決定し将来を左右する」旨が聞かれた。これは、勉強への意識が幼少からシビアであり、家族も経験済のため、一層教

育熱心な可能性が示唆される。更に、「ラグビーは短命で、勉学は引退後に必要」とも聞かれた。これは、就業に対する姿勢からとの内容が読み取れる。

「金銭的サポート」について、トンガ王国の3名全員が「日本は留学費用を全額負担するため一番目に選択する」と話す。また、「他国は留学費用は半額程度で、ラグビーの競争も激しい」旨聞かれた。

特筆すべき事項として、トンガ王国で3名全員がラグビーは国を代表とするスポーツと述べる一方、同国代表にトップ選手は少数と聞かれた。W杯等の常連国だが、海外で代表歴のない選手で代表を構成する実状も示された。この点に関し、「我々は、他国の代表に選出されれば彼らを喜んで応援する」と述べ、「日本で活躍した先人達を目指す人は多く、日本のラグビーがW杯等で活躍して嬉しい」旨の発言を得た。その結果、他国が自国より強くても、トンガ王国国民がサポートしていることを心から喜ぶ姿勢が伺えた。競技力強化施策など日本に限らず、国際的なスポーツ政策でも、自国の強化が当然とされるなか、トンガ王国は他国の競技力強化に自国の選手が関わることに理解を示すことは、特筆に値する。

VI. 結論

本研究の結論：トンガ王国は、離散社会であり歴史を通してみるとニュージーランドを始め海外に出稼ぎに行き、本国の家族を支援することが示された。本研究において、日本における外国人スポーツ留学生の来日前から来日後現在に至るまでの実態を、大東文化大学とトンガ王国に着目し、ライフストーリーを通して明らかにすることが出来た。

実践への提言：外国人スポーツ留学生に焦点を当てた国際交流などを通じ、新たなスポーツ政策の提言に繋げられる可能性がある。また、本研究のように、離散社会で日本に定住してくれるような国や地域に焦点を当て、外国人留学生受け入れを促進することで、日本の経済成長に貢献する可能性がある。そのためには、歴史的・文化的背景を知る必要がある。そして、移民政策を議論する上で離散社会にスポットを当てることで、新しい見方が示されたいと考える。更に、トンガ王国について、離散社会ゆえに出稼ぎなどにより国内経済が成り立つのか。それとも、出稼ぎなどに行き本国に金銭を送付することから、離散社会が成り立つのか。どちらの要因が大きいのかを把握することが求められる。